

研究論文

与論島観光におけるイメージの変容と現地の反応

Changing Images of the Yoron Island and the Local Responses in the Context of Tourism

神田 孝治

Koji Kanda

和歌山大学観光学部

キーワード：観光、イメージ、コンフリクト、地域社会、与論島

Key Words : Tourism, Image, Conflict, Local Community, the Yoron Island

Abstract :

This paper examines the relations between the changing images of the Yoron Island and the responses from the local community in the context of tourism. Conflicts between hosts and guests are specifically examined, paying attention to the contradictory nature of tourism.

I. はじめに

観光地と呼ばれる観光の目的地となる空間では、しばしば様々なコンフリクトが生じている。その理由としては、一つには観光地が矛盾した空間であることがある。観光地においては、非日常を求める観光客のまなざし¹⁾に関する議論にあるように空間の差違化が重要となるが、一方で近代的なホテルの建設や交通機関の発達のような空間の均質化も必要である。こうした特徴は、ルフェーブル (Lefebvre, H.)²⁾ が「空間の矛盾」として表現した近代空間の矛盾であるが、人々の欲望が投影された差違の空間である観光地は、この二つの矛盾した傾向が強い空間であると考えられる³⁾。そのため、例えばマス・ツーリズム批判においてしばしばやり玉に挙げられる自然破壊のような、空間の均質化をもたらす観光開発と差違化を維持する自然保護の間でのコンフリクトが発生するのである。またもう一つの理由として、観光が日常生活世界から他所への移動をともなう実践であることから、観光客（ゲスト）と観光地に住まう住民（ホスト）との間でコンフリクトが生じやすいことがある。この点については、二項対立的に産み出される他所の心象地理について論じたサイード (Said, E.) の議論⁴⁾ からわかるように、往々にして観光客と現地住民の間の権力関係が密接に関わるものであり、またイメージの問題においても発生することがあるものである。

ただし、こうした観光に関するコンフリクトが表面化し社会的に問題となったのは、1970年代頃のいわゆるマス・ツーリズムの時代であり、オルタナティブ・ツーリズムなどが叫ばれる近年では、観光をめぐる様々なコンフリクトを顕在化させないよう、

その融和が図られている場合が多い。そこで本稿では、マス・ツーリズムの時代のコンフリクトの諸相を確認すると同時に、それが現代の観光においていかに融和しているのかを、観光地のイメージに注目するなかで検討することにした。なぜイメージに焦点をあてるかといえば、それが観光客にとっての観光地の魅力や、ホストとゲストの間でしばしば見られるアイデンティティの問題などをめぐる文化的な政治対立を理解するのに極めて有効だからである。特に本稿においては、観光地のイメージ及びそれが産み出す場所神話⁵⁾の変容と、それに対して現地の地域社会がいかに反応したのかに注目して考察を行うことにする。

事例として取り上げるのは、1970年代に観光ブームを迎え、外部から付与されたイメージとそこから生じた観光客の諸実践を中心に、観光客と現地住民の間でのさまざまなコンフリクトが表面化した、鹿児島県の南端に位置する与論島である。この与論島は、2007（平成19）年に公開された映画『めがね』のロケ地として近年新しいタイプの観光客を集めており、そのイメージも観光のありかたも1970年代のそれとは大きく異なるものになり、現地の地域社会に受け入れられている状態にある。そこで本稿では、第Ⅱ章において与論島観光の系譜を確認した後で、第Ⅲ章で観光ブーム期の与論島のイメージとそこで生じたコンフリクトについて検討し、第Ⅳ章において映画『めがね』による与論島のイメージやそれが産み出す観光への現地の対応を明らかにするなかで観光ブーム期との違いについて考察することにした⁶⁾。

II. 与論島の観光地としての系譜

与論島は、奄美群島の南端、沖縄本島の北方約 23km の距離にある、周囲約 21.9km の島である。この地を含む北緯 30 度以南の南西諸島は、日本の敗戦により 1946（昭和 21）年 3 月 13 日から米国海軍軍政府の統治下におかれたが、1953（昭和 28）年 12 月 25 日に与論島以北の奄美群島は日本に復帰した。そのため、1972（昭和 47）年に沖縄が日本に復帰するまで、与論島は南西諸島における日本最南端の島となっていた⁷⁾。

日本復帰後の奄美群島においては、1960（昭和 35）年頃には観光が注目を集めるようになっていたことが認められる。この年に鹿児島県は奄美群島の姿を広く全国に紹介するため映画『奄美』の製作を開始しており⁸⁾、また民間企業も奄美大島において亜熱帯植物の植樹による南国情緒創造へ向けた運動などの観光振興へ向けた動きをはじめていた⁹⁾。1961（昭和 36）年の夏には、「純然たる観光旅行はごくわずかでほとんどが調査研究の目的」である学生が奄美大島の名瀬市を多数訪れたことが報じられ、これら学生の宣伝によって、翌年から多くの観光客が来訪することが期待されている¹⁰⁾。奄美群島のなかでも観光振興において先行したのは徳之島で、1962（昭和 37）年 4 月に東亜航空が航空機を就航すると、同年 10 月には観光協会が設立されて観光地づくりが積極的におすすめられるようになり、翌年にはヘルスセンターやホテルが相次いで建設された¹¹⁾。同島は、“東洋のスマールハワイ”としてマスコミに宣伝された結果、1963（昭和 38）年春には観光ブームを迎えたことが報じられている¹²⁾。こうした状況下で、同年 7 月および 8 月の 2 ヶ月間で、「南国ムードをたのしみながら研究をしようという一石二鳥組」の「“観光学生”」を中心に、奄美大島に前年のほぼ二倍の推定 4,600 人の観光客が訪れ、マスメディアの影響で「奄美ブーム」が生じたことが指摘されるようになっている¹³⁾。たしかに、同年 7 月に発行された雑誌『旅』では、「魅力の島めぐり」を特集し、「今年は島ブームだといわれる」として「今年は島へあこがれる旅行者が激増していること」や「今年の夏には各大学の学生が島へ行く」状況を報じ¹⁴⁾、「魅力の島ベスト 10・最新ガイド」という記事では奄美群島をその一つとして紹介している。これらから、奄美群島への観光は 1963（昭和 38）年には実質的に始まったと考えることができる。

しかしながら、奄美群島のなかでも与論島については、観光への注目が遅かったことが確認される。例えば、『与論新報』や『南海日日新聞』といった、与論島ないしは奄美群島に関する記事を掲載する地元の新聞では、当地における観光振興に関する言及は、管見の限り 1964（昭和 39）年 1 月 1 日の与論町長による「常夏の楽園の島」とすべく施策している旨の発言まで認めることができない¹⁵⁾。また、実質的な観光振興への取り組みとしては、観光資源として鍾乳洞が発見されたことを契機に 1965（昭和 40）年 4 月に観光協会が役

場主導で設立されたことが最初であり¹⁶⁾、町制要覧でも 1968（昭和 43）年 2 月発行の昭和 43 年版においてようやく観光についての解説がなされている。このように、行政をはじめとする地元における観光振興への期待は、他の奄美群島よりも大きく遅れていたのである。メディアによる紹介としても、例えば、先の 1963（昭和 38）年 7 月発行の雑誌『旅』の奄美群島紹介において与論島は取り上げられておらず、同誌においては 1968（昭和 43）年 6 月発行の「船旅と離島の旅情」の特号でようやく言及される状態であった。観光客についても、1965（昭和 35）年 8 月には他島と同様に学生調査旅行団が与論島を訪れていたが¹⁷⁾、茶花港への年次別降船客数が 1958（昭和 33）年から 1967（昭和 42）年の 10 年間は平均 5,678 人で大きな増減をみせていないことから¹⁸⁾、この間の観光客数は少なかったと考えられる。こうした背景には、1968（昭和 43）年までは鹿児島から与論島まで最優秀船で 23 時間、その他の船で 32 時間を要するという交通環境の問題があったことが指摘されている¹⁹⁾。1962（昭和 37）年の紀行文において、与論島から鹿児島まで船で 4 日を有したこと、さらにそのうちにしばしば来ない定期船を待つための二日間があったことが同島の問題点として挙げられているように²⁰⁾、1963（昭和 38）年頃にはじまる奄美ブーム時にはその交通環境がために観光振興が容易ではなかったのである。

このように観光地としては当初注目されていなかった与論島であったが、1967（昭和 42）年段階に 7,993 人であった観光入込客数が、1968（昭和 43）年には 9,070 人に、その後、1969（昭和 44）年 14,535 人、1970（昭和 45）年 21,480 人、1971（昭和 46）年 37,258 人、1972（昭和 47）年 45,539 人、1973（昭和 48）年 69,986 人と大幅な増加をみせていった²¹⁾。宿泊施設についても、1967（昭和 42）年以前は 5 軒で収容人数約 100 人であったものが、1969（昭和 44）年に 7 軒、1970（昭和 45）年には 6 軒、そして 1971（昭和 46）年には 25 軒が新設され、1973（昭和 48）年の段階で宿泊施設数 62 軒、一般客収容人数も 1,800 人を上回る状態になっていた²²⁾。こうした増加の背景として、一つには 1960 年代中頃から、自然回帰を唱えるヒッピーを中心とする若い旅行者が、自然が美しいことや住民が旅行者に優しいことなどから、与論島という「日本最南端の島に楽園」を見出し、それを口コミで広げたことが挙げられている²³⁾。さらにより影響が大きかったものとして、日本における国立公園選定に大きな役割を果たした日本海中公園センター理事の田村剛が、1967（昭和 42）年 7 月 29 日に海中公園候補地調査のために与論島を訪れ、「与論島は東洋の海に輝く一個の真珠である」とそのサンゴ礁の美しさを絶賛したことが指摘されている²⁴⁾。加えて同年 8 月 28 日から 9 月 2 日まで与論町からの観光団 440 名が東京を訪れたことが、海中公園候補としての与論島の美しさとあわせてテレビ・新聞・雑誌等のメディアで報道され²⁵⁾、かつ翌年 2 月 26 日には NHK の新日本紀行で与論島が紹介され

ている²⁶⁾。こうした与論島への注目を受けて、近畿日本ツーリストが1968(昭和43)年夏にキャンピングツアーを企画²⁷⁾して、翌年には本格的に与論島を含む奄美観光の売り出しを計画するようになったのであり²⁸⁾、同社を含めてこの頃から「日本のハワイ、グアム」と旅行業者が同島を宣伝し、そこに多くの観光客を送り込むようになったのである²⁹⁾。1960年代中頃までは奄美群島における観光地としては出遅れていた与論島であったが、こうした動きの結果、1970(昭和45)年には離島ブームの奄美群島の中でも「与論島に人気が集まり空前のにぎわい」であることが報じられ³⁰⁾、1971(昭和46)年2月発行の雑誌『旅』では奄美群島の中でも与論島におけるサンゴ礁の海中景観や砂浜をグラビア写真で強調するようになっていた。観光客の増加率も、1972(昭和47)年から1973(昭和48)年にかけて、奄美群島全体が123.4%に対して与論島は164.6%で奄美5島中1位となっており³¹⁾、観光客が増加する奄美群島の中でも特に与論島がその中心的位置を占めるようになっていたのである。また1972(昭和47)年の雑誌記事では、「人の集まる場所には群れたがるのが日本人の特性。昨年の国内観光地の目玉商品は、北の知床と南の与論島だったようである。」³²⁾と記しており、当時の与論島はまさに日本を代表する観光地に位置付けられるようになっていたことが認められる。

こうした与論島の状況について、1971(昭和46)年8月に発行された雑誌『毎日グラフ』で以下のように描き出している。

島民の数、七千二百人、昨年のピーク、七月の下旬から八月にかけて、島内に約三千人の観光客が居すわり、二十軒の旅館と民宿は六畳間に七～八人もつめこんでもらったという。そのブームが、今年は三倍増。町の予想では、ピーク時で九千人、島の人口を上まわる。…鹿児島からの便も、照国郵便が、二千トンの「ハイビスカス」を建造し、一日一便から二便が着くようになった。…なにしろ、日本中から、どういふわけか「ヨロン、ヨロン」と、学生や、OLたちが南下するようになったのである。

…

茶花という何もないところに現在、パチンコ屋二軒、バー、スナック、喫茶店が八軒、みやげもの屋が、軒並みせまじと、パイプウニの首飾りや、サンゴ、貝を売り、民宿の前で、ホットパンツの若いOLがトンボメガネをかけて歩くさまは、もう立派(?)な、夏の行楽地である。

…与論島には何かがあるという。女性も半分“冒険の島”などと、マスコミで宣伝されるため、半分おそろおそろ、しかし大部分は興味にかられ、雄大な自然と、何かを求めて南下する³³⁾。

ここに記されているように、増大する観光客の多くが夏期に当地を訪れており、1971(昭和46)年では、7～8月の2ヶ

月間における入込観光客数は年間の約半数にあたる42.4%であった³⁴⁾。また、ここでは「学生」や一般職の女性会社員・事務員である「OL」が観光客の例として挙げられているが、少なくとも1971(昭和46)年8月の与論町役場による調べによれば、観光客の職業別内訳は学生48.6%、会社員39.3%、公務員3.0%、その他が9.1%であり、学生が約半数を占めていたことが認められる³⁵⁾。OLの比率については確認できるデータは管見の限り存在せず、また男女比率に関する調査もみあたらない。しかしながら、「やはり二十歳前後の若者が圧倒的。職業別だと学生、OLの順だが女性が多いという。女性のユメをくすぐる島ということになるらしい。」³⁶⁾、「東京、大阪の旅行業者が与論観光団を募集すると、一日で満員になるが、その九割がオフィスガール」³⁷⁾、「観光客の八割は若い女」³⁸⁾などと、1971(昭和46)年に発行された新聞・雑誌記事ではOLをはじめとする若い女性の多さが言及されていることが確認でき、与論町役場における聞き取りでもこうした傾向が指摘されている³⁹⁾。もちろん、このような言説には根拠となる情報がなく、また次章で述べるようにかかるイメージ作りと観光地化が密接に結びついていたことから信憑性に疑問があるが、証言の多さから若い女性の比率は比較的多かったのではないかと推察される。さらにこうした観光客の特徴としては東京からの来島者が多く、1971(昭和46)年8月の段階で観光客の55%を占めており、またこうしたなかで「パチンコ屋」や「バー、スナック、喫茶店」などを備えた都市的な空間も出来あがっていき、1970(昭和45)年には「東京都与論島」などといった表現もなされるようになっていた⁴⁰⁾。

以上のように若者にとっての「夏の行楽地」となった与論島であったが、1970(昭和45)年頃には、「人は絶えず国境線にあこがれ、南にあこがれ」を持つため、1972(昭和47)年に沖縄が本度復帰を果たすと与論ブームは終焉を迎えるのではないかと指摘もなされるようになっていた⁴¹⁾。結果としては、沖縄経由の観光客の増加や1976(昭和51)年の与論空港開港といった交通環境の改善などを背景にその後も観光客は増加し、1979(昭和54)年には150,387人の入込客数を記録する。ただし、石垣島に航空機が就航すると「南の最果て性」が石垣島を中心とした地域に移動すると同時に、沖縄の観光開発の本格化、海外旅行ブームといった状況の変化の中で、1980(昭和55)年以降は観光客が漸次減少していく。2009(平成21)年には58,048人となり、最盛期の三分の一近くになっている⁴²⁾。

こうした状況に対応し、与論島においては官民一体となって様々な観光振興への取り組みがなされていく。1983(昭和58)年にはパロディーのミニ独立国「ヨロンパナウル王国」を建国し、翌年にはギリシャのエゲ海に浮かぶミコノス島と姉妹盟約を締結して、その後にミコノス島をテーマにしたまちづくりを展開するなど、新しい観光資源の創出を図っていった。また、ヨロンパナウル健康ウォーク(1990)、ヨロンマラソン(1992)、

パナウル王国杯争奪グランドゴルフ大会（1999）、ギリシャ・フェスティバル（1997）などといった様々なイベントで、夏期以外の多様な観光客の集客にも努めていった⁴³⁾。しかしながら、こうした取り組みにも関わらず、夏期の観光客の落ち込みが大きく、最盛期のほぼ五分の一の水準であるため、全体としては大幅に観光客を減らしている状態にある。

Ⅲ. 観光ブーム期の与論島イメージとコンフリクト

1) 与論島のイメージとその諸相

a) サンゴ礁の青い海のイメージ形成

与論島は、1970年代に人気の観光地となるにあたって、そのイメージに大きな変容があったことが認められる。例えば1957（昭和32）年11月に発行された雑誌『中央公論』に、「南の涯ての人々—国境の島・興論島へ行く」という記事が掲載されているが、そこでは「米などろくに食べられ」ずに「主食はさつま芋であること」や渇水の問題など挙げて、与論島が困窮しており「その生活も原始的なもの」であることが記されている。また、「鹿児島から約三十六時間、月四回ほど定期船の名のつく便が通っているが」欠航が多く「冬の間など二十日間も本土との交通が途絶」してしまう島で、日本に復帰した1953（昭和28）年頃は本土の人々に関心を持たれていたが「今ではまったく『忘れられた島』になってしまった」ことも伝えている⁴⁴⁾。当時の与論島とは、貧しく、かつ忘れ去れてしまったかのように、人々の意識にはのぼらない観光とは無縁な島だったのである。

奄美群島において観光が注目されはじめた1960（昭和35）年の与論島への紀行文でも、住民の生活の厳しさ、交通環境の問題、そして忘れられた島であることが記されており、こうした状況に大きな変化はない。ただ同時に、「島それ自身がサンゴ石灰岩からなる与論島の海は特に見事である…私はこんな美しい海の色を想像してもいなかった」と、海の美しさについての言及もなされるようになっていく⁴⁵⁾。その後の1962（昭和37）年の小田実が著した与論島への紀行文でも、以下のように記されている。

わたしはといえば、出かけるまえ、わたしの心はなんの映像も、その島について、結ばなかった。それが離島であるということのほかには、見当がつかなかったのだ。

…

きれいな、夢みtainな島——これが与論島のもつ第一の顔であろう…この世ならぬ、すくなくとも日本ならぬ風景が展開する。ことに海岸。アダンの大きな実が密生するなか、白い砂浜がのび、サンゴ礁の内海の水はあくまで透明、底にはサンゴの群生がのぞく。

…

船が行かない。来ない。そこから貧困が発し、島民の意識のおくれが発し、とどのつまり、「いやな与論」という第二の与論島の顔に、第三の顔、わたしと友人の会話に典型的に

見られる「忘れられた島」の顔がオーバーラップして現れるのだ。「ふうん、それ日本かいな」人々は、そうしたことばを、その顔に投げつける。⁴⁶⁾

小田は、「きれいな、夢みtainな島」、貧困や島民の意識の遅れといった「いやな与論」、そして「忘れられた島」という与論島の3つの顔を指摘し、先述のような当時の認識を簡潔にまとめている。ただしここでは「きれいな、夢みtainな島」が第一に掲げられており、強調されるイメージが若干変化していることが認められる。1961（昭和36）年発行の『何でも見てやろう』（河出書房新社）でベストセラー作家となった彼のこうした紀行文によって、かかる与論のイメージも流布するようになったと推察され、実際、その影響を受けたと思われる紀行文も確認することができる⁴⁷⁾。とはいえ、出かける前に与論島について何のイメージもわかかなかったと小田が述べているように、当時はまだ社会的には注目されない離島に過ぎなかったと考えられる。

しかしながら、1963（昭和38）年以降、与論島は世間の耳目を集める島となる。同年から1968（昭和43）年までの毎年4月28日に、沖縄返還運動の海上大会が与論島沖の27度線上で開かれ、与論島は日本側の拠点となったからである⁴⁸⁾。1968（昭和43）年6月発行の雑誌「旅」における与論島の紹介文でも「毎年四月下旬には、この島の名が全国の新聞、テレビ、ラジオなどに登場する。沖縄返還海上大会の拠点となるためだ。」とその冒頭に記し、「沖縄返還海上大会の前夜祭の会場となる琴平神社」についても紹介していることから⁴⁹⁾、この沖縄返還運動にともなう海上大会が与論島のイメージとなり、またそれが同島の観光地化にも関係していたことがわかる。実際、前年の新聞では、「この夏は本土からたくさんの学生がやってきた。島の中央、琴平神社に建てた日本復帰記念碑には観光客が毎日のように訪れる。ここからは沖縄が呼べば答えるように近くに見え、観光名所になっている。」⁵⁰⁾といった状況を記している。さらに1969（昭和44）年には、60年安保時の全学連委員長であった唐牛健太郎が与論島を訪れてそこで暮らし始めたというニュースが伝わり、同島への興味がかきたてられたことも指摘されている⁵¹⁾。与論島とはこのような政治的な問題と関係するなかで注目され、またそれがために観光客が集まりはじめていたのである。

こうした与論島であったが、その後に「海上集会の島」から「観光の島」への転換⁵²⁾が起きる。この契機となったのが前章で紹介した、1967（昭和42）年7月の田村剛による海中公園調査である。この時に田村が「与論島は沖縄を含めて考えても出色の島で観光の面から見ればハワイに匹敵する。景観の質ではワイキキの浜のような素質を持っている。」⁵³⁾と述べたことなどが新聞紙上を賑わし、彼が言ったとされる「与論島は東洋の海に輝く1個の真珠である」が与論島のキャッチフレーズになっていった⁵⁴⁾。また翌年2月にはNHK

の新日本紀行において「水中撮影によるサンゴ礁の景観、バナナ、パパイア、ブーゲンビリア、ハイビスカスなどの熱帯植物が茂る特異な景観」が放映されたことをはじめとして⁵⁵⁾、3月発行の女性雑誌『若い女性』では「いちばんきれいな海で泳いでみたくてたずねた与論島」と題した記事で、「濃緑色のサンゴの群落の間にナンヨウハギやチョウチョウウオが群遊している」様子などを描きながら、「まるで竜宮城をまのあたりにみせられたような感じ」であると与論島の海中景観を表現し⁵⁶⁾、6月発行の雑誌『旅』でも「海底のサンゴがうき上がるほどすみきった海中に、ムラサキ、アカ、黄色とさまざまに輝く熱帯魚が遊泳している」などとその海の美しさが描き出されていた⁵⁷⁾。このように、田村剛による海中公園候補地調査およびそれに関する彼の発言をきっかけに、翌年の1968(昭和43)年には多くのメディアが与論島の海中景観を賞賛しはじめたのであり、与論町役場が発行する町制要覧も同年に観光に関する項目を新設し、「サンゴショウを敷きつめた海岸線にかこまれ、エメラルド色に輝く海に浮く生きた島です。」などと紹介するようになった。また当時の新聞記事では「彼らのだれにきいても『海がすばらしい』という」などと、観光客にとっての与論島の主たる魅力として海があることを指摘し、「あの青い青い、文字ではあらわせない海の色、あの青さが私の欲求のすべてを満たしてくれました。与論の海に比較するともう他のどんな美しいものも受け入れることはできません。」と記した若い女性の宿への礼状も紹介している⁵⁸⁾。与論島はまさにサンゴ礁の青い海のイメージによって観光客を惹きつけるようになっていったのである。

b) 自由および恋愛のイメージと場所神話

与論島の観光客にとっての魅力としては、「空気はいいし、わずらわしい人間関係に、しばられることもない。必要な時だけ土方でもして金を得ればいいわけだから、“脱都会派”にとっては天国なのだ。」⁵⁹⁾などと、都市との対比から理解したものも当時の雑誌・新聞記事では多い。なかでもそうした際に観光客が抱く与論島のイメージないしはそこでの場所神話について、当時の新聞記事は以下のように伝えている。

「解放されたんだ。自由なんだな。まったく楽しくなるよ」
「からだを縛っている糸が、みんな切れちまったような…」
「この気持ち、来てみなくちゃわからないサ」
—若者たちの強調するのは自由。与論で初めて味わったと言う。だれもが、ここでは束縛をさらう。名前を知られることさえも。…

若者たちは、本土に仕事や勉強を置いて来た。満員電車も書類箱も卒業論文も与論では遠い悪夢。人間の巨大な組織社会の中に組み込まれ、満たされぬ思いだった若者たちが、ここでは伸び伸びと自然にとけ込む。「都会のことなど知るものか」—こういう声を方々で聞かされた。⁶⁰⁾

この記事では、若者たちが、都会を逃れて与論に「自由」を求めていることに言及している。こうした声は、与論からの帰りの船において、「束縛が一切ない本当の自由。どうやらボクは、あの島でシアワセって奴を見つけたと思うよ」と述べた若者の発言を掲載した他の雑誌記事⁶¹⁾にも見出すことができ、与論島へやってくる観光客にとっての大きな魅力であったと考えることができる。

さらにより頻繁に語られる与論島の魅力としては、恋愛に関するものがあった。例えば、既に1960(昭和35)年の紀行文で、「夜遊(ヤユウ)と呼ばれる昔ながらの恋愛形式」が同島にあること、その内容とは「この島の若者達は昼間の仕事が終わると、焼酎を下げながら若者らしい話題に花が咲いたのち、その中の一人が娘とうまくぬけ出して浜辺で蛇皮線を引きながら、哀調のこもった沖縄民謡に似た歌をうたう。この風習が島で公認されている恋愛機関のない習慣で、…夜の浜辺のデイトは都会の恋人達と違って大らかなランデブーであった。」ことを記している⁶²⁾。これについては、先の小田実の紀行文でも以下のようにその魅力を描き出している。

「夜遊^{やゆう}」ということばがあつた。いとも典雅なことばであり、そのことばにふさわしい典雅な風習を意味していた。むかしは浜辺で、したそうだが、年ごろの未婚の女の子のところに、独身男が数人集り、むかしは蛇皮線を男がひいて女がおどり、今はギターで同じように踊ったり歌ったりする。与論島の家は奄美一帯がそうだが、母屋と食事をするところは別棟になっているし、それに物置などもべつのところにあるから、この行事に、親が顔を出すというようなブザマなことはしない。

それどころか、娘のところに、青年が来てもらわないと困るのだ。ここから恋が芽生え、結婚が生れるのだから。来る男の数は多ければ多いほどいいわけだ。「フランスのサロンを思わせるな」「とにかく、いいことばだよ、『夜遊』というのは——ちよっと、『夜遊』に言ってきます。いいね」東京へ帰ったら、はやらせようということになった。⁶³⁾

この与論島における夜遊は、1968(昭和43)年の雑誌『旅』における与論島案内では、「これから夏場にかけて、島の若者たちは夕食をすますと、蛇皮線を持ち寄り、海岸で“夜夜(ゆるゆる)ぬ遊(あす)び”に興ずる。夕なぎの砂浜で繰り広げられる若い男女の楽しいついで“旅行者の飛び入りも大歓迎。”⁶⁴⁾などと、観光客も参加出来るものとして紹介されている。こうした与論島における若い男女の恋愛は、男性からの視点ばかりでなく、同年に発行された女性雑誌「若い女性」の記事でも、海岸において出会ったばかりの若い男女がバイクに乗って次々と消えて行く情景を描き出しており⁶⁵⁾、男女ともに注目する与論の風習として紹介されていたのである。

こうした夜遊という与論の風習を紹介しながら、与論島に過剰ともいえる恋愛のイメージないし場所神話を産み出したの

が、1971（昭和 46）年に発行された週刊誌の記事であった。「ブームの与論島の聞きしにまさる性解放」と題された当該記事では、「島の娘をモノにするのは簡単や」といった声を取り上げるなかで、都会からやってくる青年が夜遊を乱しはじめていることを伝え、さらには「もっと簡単なのは、島の娘より観光客の若い女性」と記し、「観光客の八割は若い女で、しかもみんな遠い“異国”にきた開放感か、セックスしうてムズムズしてる感じ」などといった声を紹介し、「かくてこの島の浜辺では、いたるところで性の狂宴がくりひろげられ」ているとしている。その他にも、「“即席夫婦” “即席恋愛” が大はやりで警官もお手あげの日本最南端の島の珍騒動」、「夜ばいの習慣も残る与論島だが、“南海の別天地”の魅力が喧伝されて続々やってきた、本土の男女のなみはずれた無軌道ぶり…都会のプレイガールを狙う近くの島の男たちも多数上陸して、今や乱れぶりも最高潮。」、「島の娘は美人ぞろい」、「さながらヌーディスト島」などといった見出しのもとで、与論島における若い男女の恋愛を赤裸々に描き出している⁶⁶⁾。こうした記事はその後に発行された大衆誌でも続き、「サンゴ礁、青い海、孤島のロマン——いろいろあるが、この夏のシーズン、混んだ時にわざわざ出かけるのはガールハントがメイン。男 1 人に女 10 人の率といつていいほど、女の子が殺到しているで与論島。」⁶⁷⁾、「そのほとんどが二十歳前後。『やっぱりある程度の期待はするわ』と女のコ。『そりゃあそうさ』と男のコ。こうしてインスタントカップルの出来上がり。」⁶⁸⁾などと、そこを若い男女の恋愛の聖地として描き出していたのであり、またそれがために若い観光客が多数与論島を訪れるようになったのだと考えられる。

2) 観光客と現地住民の間でのコンフリクト

以上のように外部から様々なイメージが投影され、次第に観光客が訪れるようになった与論島であったが、それに対する現地住民の反応は当初良好であった。田村剛が海中公園候補地の調査に訪れその海の美しさを賞賛すると、住民は「“島おこし”の意気にもえている」⁶⁹⁾状態となり、また若者が多数訪れるようになると、「海が日本一きれいだし、最南端の島だから」、「都会生活は大変だ。心の洗たくには与論が一番だもの」というように与論の魅力を理解して観光客を暖かく迎えた⁷⁰⁾。1969（昭和 44）年のある高校生の文章でも、「与論は、世界のどこにも見つけがたい心の聖地である」という観光客の言葉を受け、「与論に生まれ育った私達にとっては、何にもまさって一番うれしいことである。たとえそれが、おせじであったとしても……。」と述べている⁷¹⁾。サンゴ礁の海の南島や自由の島というイメージで観光客にとって魅力があることは、自らの生きる地域が認められたということで、住民にとっても前向きに理解される傾向があったのである。

しかしながら、特に恋愛や性に関係する同島のイメージや観光客の実践によって、現地住民の反応は大きく変容してい

くことになる。住民による観光客に対する批判の声は、「女子大生?が、ときたま水着とパンツだけで、太股（もも）をむきだしに街の中を歩いている。まるでアヒルの横ばい——文化人として失格であると、街の人達はまゆをひそめている」⁷²⁾などと、観光客が増え始めた 1969（昭和 44）年頃から新聞記事で取り上げられるようになる。こうした状況および地元住民の感情について当時の新聞では、「若者たちの満足度が高まるのとは反対に、住民達は顔をしかめるようになった。彼等の傍若無人のふるまいが反感をかうのである。若い女性たちは、近くの海で泳いだままのビキニ姿で街を練り歩く。バスにも乗り込んでくる。最初からアベックでくるのもいるし、島で一緒になる“与論妻”もいる。男女関係には非常にうるさい島の人たちにとって、他人事でも我慢できないのだ。」⁷³⁾と説明されている。「今度来る時は一人できて、思い切りハレンチにやるわ。都会じゃあできないものね」⁷⁴⁾という女性観光客の声にあるように、恋愛に自由のイメージや場所神話が結びついた「傍若無人のふるまい」が、特に地元住民の反感を買ったのである。こうしたことから 1970（昭和 45）年 8 月には地元の青年 6 人が「島を出て行け」と罵りながらキャンプ中の観光客を襲撃する事件が起き、それに対して加害者の方に同情の声が上がるという状況が生じたり⁷⁵⁾、海岸には「観光客へのお願い」と題して「公衆の目に触れる場所で、人にけん悪の情を催させるような仕方であり、ももなどをみだりに露出しますと、軽犯罪法に違反しますので、このような行為はつつしんで下さい。」という看板が掲げられたりするようになったのである⁷⁶⁾。

こうした観光客に対する地元住民の反発の声が最も大きくなったのが、先の週刊現代の記事であり、「島内の世論はにわかに煮えたぎった。かねては人のいい、忍耐強い与論町民が激怒」したとされる⁷⁷⁾。「夜ばいだの、フリーセックスだの、週刊誌の記事はまるで“南洋の土人”扱いではないか。未開の土地を探検する文明人の発想ではないか。」と本土側からのまなざしが批判の対象となり、「日本中から注目され、誇りがましく思っていた。その誇りを傷つけられありもしない恥部をさらけ出された。そんな感じですね。」と、週刊誌が描き出す与論島は地元の人のアイデンティティと対立するイメージとなっていたのである⁷⁸⁾。特にこうした性的なイメージに対する与論島民の反発は根強く、例えば 1964（昭和 39）年には「セックスがかなり正面に押し出され」た「近親相姦の問題を取り上げる」映画『パラジ』のロケ地になるという話があったが⁷⁹⁾、与論町議会はこの映画の製作反対を議決している⁸⁰⁾。奔放な恋愛や性に関わるイメージは、与論島では大きな反発を招く対象だったのである。

またその他にも、観光客の増加にともなう様々な弊害が地元住民からの批判の対象になっていた。観光客の増加は、与論島にそれまでほとんどなかった盗難事件を発生させ、特に 1971（昭和 46）年 5 月に発生した遺骨盗難事件は地元住民の怒りを買うことになった⁸¹⁾。サンゴも盗難の対象となり、観

光客が帰ったあとは「まるでイナゴの大群が通り過ぎたようだ」といわれる状態になった⁸²⁾。観光客が与論島でおこなう「自由」な振る舞いが、地元住民の批判の対象となっていたのである。観光客の増加はその他にも、物価の高騰、水不足、ゴミ公害、島民の心の退廃などのいくつかの悪影響を地元にもたらした⁸³⁾、その結果、先の週刊誌発売後間もなく実施された与論高校新聞部のアンケートでは、同校生 300 人中 156 人、町民 96 人中 80 人が観光ブームに反対するという状況が生じていたのである⁸⁴⁾。

このような対立から、「はじめヒッピーが、そして若者たちがあこがれた与論の純朴な人情は、ささくれ立ち、不信と敵意、さげすみと無関心が島民のところに根ざしてしまったかに見える。」⁸⁵⁾と指摘されるようになった。しかしながら、観光地化に反対する現地住民も、「頭からぜんぶ反対というわけではありませんよ。モテすぎて当惑すると言いますか、島が荒らされないような静かなブームなら、みんな大歓迎でしょう。…」⁸⁶⁾と、観光地化を忌避しながらも、観光による地域振興を一方では期待し、適切なバランスがとられることを求めているのである。結果として、与論島ブームが過ぎ去る中で、観光地化による観光客と現地、ないしは観光客同士の対立は顕在化しなくなっていった。与論ブーム時の与論町長は「受入れ体制がととのわないのに、旅行業者がどんどん団体を送り込んで…困惑している現状です。」⁸⁷⁾と述べていたが、今度は逆に与論島側が主体的に観光客を誘致する必要が生じ、第Ⅱ章で述べたように、1983（昭和 58）年に「花」と「サンゴ」を意味するパロディ国家の「ヨロパンナウル王国」を建国して既存のイメージの延長線上で南の島であることを強調したり、通年的な集客を図るために様々なイベントが実施されたりすることになった。しかしながら観光客の減少は食い止めることはできず、たしかに観光客をめぐるコンフリクトはみられなくなったが、観光振興の面で課題を抱えるようになったのである。

Ⅳ. 映画『めがね』による与論島観光に対する現地の反応

1) 映画『めがね』の喚起する与論島のイメージ

観光ブーム期以降、外部からのイメージ創造による観光客の集客が停滞していた与論島であったが、2007（平成 19）年 9 月に公開された映画『めがね』によってまた新しいイメージが創り出され、観光客を集めるようになっていく。「何が自由か、知っている」をキャッチコピーとするこの映画の概要は以下のように説明されている。

「外さないように、失わないように」してきた人生を、
ふっと一回休んで、ここに来た。

しかしなんだろう、ここで出会った人たち。
ひとりで風に吹かれて、微笑んで暮らしている。
疑わない、比べない、求めない。

それは遅しさとあり、勇気であり。大きな何か。

ひねもす春の海。
あれほどあこがれていた「自由」に、
ふと手が届きそうな気がする。

…

登場人物は、3 人の女と 2 人の男。ひとりの女性が、とまどいつつも心の赴くままに訪れた南の海辺で、物語の幕が開きます。たどり着いた小さな宿で出会う人々、彼らとの繊細かつ不思議な心のふれあいが、美しい風景をバックに繰り広げられます。

…

どこへ行くでもなく、何をするでもなく、ただ「たそがれる」。リラックスした登場人物たちの姿からは、人が本来魂に宿している、原始の豊かさが漂います。日常の鎖から解き放たれて取り戻す、自由というもの。

…

南国ならではの透明感あふれる日差しのもと繰り広げられる、生命力を呼び覚ますおいしい食事。心地より暮らしの風景。スクリーンから五感のすみずみに届く、ひろびろと手足を伸ばして生きる歓びを、ただ素直に受け止めればいい。

…

行く先が見えなくなったら、なんとなく世界とピントが合わなくなると感じたら、それがあなたのたそがれとき。まっすぐに歩いていけば、いつか必ずたどり着く。あなたもきっと経験する旅、その理想形が、『めがね』を通して見えてくるかもしれません。

⁸⁸⁾

この映画では、都会から南の島にやって来た女性と「小さな宿で出会う人々」との「心のふれあい」が展開され、そこでは「どこへ行くでもなく、何をするでもなく、ただ『たそがれる』」ことを通じて、「日常の鎖から解き放たれ」て「自由」を取り戻す様子が描かれている。ここに表現されているように、与論島に自由を求めるのは、1970 年代の観光客と全く同じである。しかしながらそこでの活動は、既存の与論観光では提起されなかった「たそがれる」というものになっている。この「たそがれる」という活動と観光の関係は、映画の中で以下のように表現されている。

シーズンオフで人気のない殺風景な空港前。
地図を見ながら歩くタエコ。
ファックスされた手書きの地図は、空港から宿までの徒歩での行き方が描いてあるが、雑で分かりづらい。

…

入口の脇に、手書きで小さく「ハマダ」とある慎ましい表札に気付くタエコ。

ユージがタエコの目線に気付く、

ユージ「大きな看板を出すと、お客さんいっぱいきちゃうでしょ。

このくらいがちょうどいいんです」

タエコ「……」

...

ユージ「私の描く地図は分かりづらいみたいで、ほとんどの人が迷うんです。ひどい人だと2時間以上この辺りでうろうろして」

タエコ「2時間…」

ユージ「分かりやすく描いているつもりなんだけどなあ……。ま、お客さん増えたら困るから、ちょうどいいんですけどね。……そういえば、迷わずに来たお客さんも、3年ぶりです」

タエコ「……」

ユージ「才能ありますよ」

タエコ「？」

ユージ「ここにいる才能」

...

タエコ「今日は、観光しようと思うんですけど、どこかいいところありますか？」

ユージ、妙な顔をして、

ユージ「カンコウ……」

タエコ「ええ」

ユージ「この辺を？」

タエコ「はい」

サクラの顔を見るユージ。

二人、顔を見合わせて困った顔をしている。

タエコ「？」

ユージ「観光するところなんて、ありませんよ」

タエコ「え？……じゃあ、ここへ遊びに来た人は、一体何をするんですか」

ユージ、少し考え、

ユージ「たそがれる……？」

タエコ「たそがれ？」

ユージ「うんうん……」⁸⁹⁾

ここにあるように、「たそがれる」という活動は、「観光」と対比されるものとして表現されている。また宿の経営方針も、観光客の増加を忌避しており、全体として1970年代の与論島であったようないわゆるマス・ツーリズムを否定しているといえる。この映画では、南の島の美しい海は表現されるが、浜辺に座り海を眺めながら「たそがれる」だけで、水着を来て海で泳いだり、海中の景観を見たりという活発な実践は行わない。さらに、「たそがれる」ことを主題とする映画の中では、男女の恋愛関係は発生しない。「自由」を求めることは1970年代の与論島ブーム時と同じであるが、観光や恋愛と切り離され、「たそがれる」ことが求められるなかで、与論島のイメージや場所神話は大きく変容しているのである。

2) 映画『めがね』を見て与論島を訪れる観光客と観光地の対応

こうした映画の舞台となった与論島に憧れて、都市部から主に一人旅の若い女性が訪れるようになっている。観光協会

への聞き取りによれば、ほぼ9:1の割合で女性が多く、20代後半から30代のOLが中心であるとのことであった⁹⁰⁾。また、そうした女性は一人旅が多く、映画『めがね』を見て来る人は映画内の宿「ハマダ」のロケ地となった宿泊施設の与論島ビレッジに泊まる人が多いとのことである⁹¹⁾。与論島ビレッジにおける聞き取りでは、女性の一人旅でカメラを持った人が多く⁹²⁾、リピーター比率も高く2011（平成23）年になってもその数は減少していないとのことであった⁹³⁾。また、なかには主人公になりきろうとして空港の周りを一人歩きし、宿がみつからなくて道に迷う人もいたとのこと⁹⁴⁾、映画の内容に強く影響されて来る観光客が存在することが認められる。そしてこの映画を観た観光客が与論島に何を求めてやってくるのかは、以下の書籍からその一端を伺い知ることができる。心情を綴った文章と写真で構成された同書は、冒頭に以下の文章が記されている。

仕事の帰りに寄った映画館
上映していた映画の台詞

『いくらマジメにやっても、休憩は必要です…そうでしょう？』

8年勤めた仕事を辞めたとき
私はあの映画の島へ行きたくなりました

必死でしがみついていたものから
手を放したとき…

私は海がみたくくなりました

映画の舞台「与論島」へ

ちょっとだけ
ほんのちょっとだけ

人生を休憩しに行ってきました⁹⁵⁾

「たそがれ」や「自由」がキーワードとなっている映画を見た筆者は、「人生を休憩しに」与論島を訪れている。その後の文章では、「働く都市から休憩する島へ」移動し、「島には交通渋滞なんてない 急ぐ必要もない」とゆっくりと時が流れる現地の状況を発見したり、「泊まったホテル ここは映画の世界そのもの」などと与論島ビレッジに映画の世界を確認したりする様子が描き出されている。またそこに掲載される写真にはほとんど人物は登場せず、たまに現地の住民が姿を現すのみである。すなわち、与論島は、都市での疲れを癒す南の島という位置付けになっているのであり、他者と活発に交流するのではなく、自己と向き合いながらゆっくりと休憩することがそこに期待されているのである。ここから、与論島に観光客が求

めるものやそこでなされる実践は、与論ブーム時のそれとは大きく異なっていることが認められる。

こうした映画『めがね』の提起する与論島のイメージや、それに憧れてやってくる観光客に対して、現地における聞き取り調査では住民の反発の声を聞くことはなかった。しかしながら、与論島観光協会の聞き取りでは、映画の舞台であることを積極的に宣伝することは行っていないということであった。その理由としては、映画『めがね』ではその舞台をどこでもない南の島とだけ設定しているため、製作会社から積極的に宣伝しないようにと言われているためだとのことであったが、観光協会としても宣伝することは映画のコンセプトと合わないと考え手控えているとのことである。映画『めがね』を見て与論島にやって来る観光客は自分で情報収集して来島するため、積極的な宣伝は逆効果であろうというのである⁹⁶⁾。またこうした意見の背景には、かつてのように大人数の観光客が訪れるのではなく、一定数の観光客がゆっくりと長期間来てくれることが望ましいという同観光協会の考え方も影響している⁹⁷⁾。こうした考えは、与論島ビレッジや与論民俗村といった観光関連施設でも提起されており⁹⁸⁾、映画『めがね』を通じた観光ブームを作ることに否定的な意見が多いことが認められる。

しかしながら、観光協会側は映画『めがね』を全く観光振興に利用しようとしていないわけではない。例えば、映画を見た観光客の質問が多かったということで、製作会社の許可をとり2008（平成20）年4月には観光案内地図にロケ地のマークを記載している。また、映画で出てきた自転車を公共の観



写真1 サザンクロスセンターにおける映画『めがね』の自転車展示
[2010年9月21日筆者撮影]



写真2 与論島ビレッジにおける復元された映画『めがね』の舞台セット
[2010年9月26日筆者撮影]

光施設であるサザンクロスセンターに2009（平成21）年5月から展示している⁹⁹⁾（写真1）。その他、公的に紹介することははばかれるが、インターネット等で観光客によって積極的に紹介して欲しいとも話しており¹⁰⁰⁾、実質的には映画『めがね』による観光振興への期待は高いものがある。与論島ビレッジでも、製作会社の許可を得て、一度壊した映画のセットをすぐに再建し¹⁰¹⁾、観光資源として利用している（写真2）。観光振興への積極的な活用を否定しつつも、ある一定程度内で活用を図るという対応をとっているのである。

V. おわりに

本稿で検討したように、与論島イメージは、1970年代の観光ブーム時と、近年の映画『めがね』が提起するものでは、「自由」という面では同じくするものの、その内容やそれが産み出す実践の点で大きく異なっている。特に映画『めがね』が「観光」を否定するなかで「たそがれる」ことを打ち出したことは、1970年代のそれとの相違として特筆されるところである。

もちろん、この「たそがれる」という活動も、実質的にはそこまで来るという移動の実践があること、非日常の「自由」を求めていること、主人公が海を眺めるシーンが多いように観ることも重視されていることから、観光の一つの形態であるといえる。さらにいえば、空港や宿泊施設の存在など、現実的には観光を支える施設や経済活動のうちで「たそがれる」ことは実現している。しかしながら映画では、こうした現実を前景化させないことで、「たそがれる」という活動を「観光」と異なるものとして提起し、現代において「自由」を求めるための重要な実践としてそれを位置づける。そもそも、「たそがれる」という行為は、多くの観光客が訪れる観光地や宿泊施設では実現が困難である。そのため、実践の内容もそれが依存するシステムも観光と同じであるにもかかわらず、またそれなしには成立が困難なのにもかかわらず、「たそがれる」ことは「観光」と対立しているのである。

そしてこのような「観光」を否定して「たそがれる」ことを推奨する映画は、1970年代の与論島で問題となったような観光や恋愛に関する実践をひきおこさない。与論島ブーム時のような観光地化に対する反発が今でも根強い与論島においては、まさしく受け入れられやすい映画でありまたその影響を受けた観光形態といえるだろう。しかしながら映画『めがね』の性格もあり、同映画を用いた積極的な観光振興は困難になっており、実際、全体としては観光客の減少を食い止めるほどの効果は有していない。「たそがれる」ことがそうであるように、映画『めがね』は観光という活動やそれによる地域振興との関係では矛盾を抱えた状態にあるのである。たしかに映画『めがね』が産み出す与論観光は、観光ブーム期とは異なり、矛盾をはらむ現象である観光がコンフリクトを表面化させないためのある一定のバランスを提供することに貢献している。しかしながらまた同時に、「たそがれる」ことを主題とする映画『め

がね』のような観光は、そうした微妙なバランスの上でしか成立しないものとなっている。社会的なコンテキストの変容にともない、近年ではマス・ツーリズムからオルタナティブ・ツーリズムへの転換が図られているが、観光の空間がはらむコンフリクトは消滅するのではなく、潜在化したり、新しいものが生み出されたりしているのである。

【附記】

本稿を作成するにあたり、ヨロン島観光協会、与論島ビレッジ、与論民俗村などの与論島内の観光関連機関の方々には、聞き取りや資料収集にあたって多大なご協力をいただいた。また、現地調査にあたっては、卒業生の池田桃子さんと四回生の大前友紀さんの助力を得た。以上、記して厚く御礼申し上げます。なお、本稿の骨子は2011年度の人文地理学会大会（於：立教大学）で発表し、本研究の調査の一部には平成22年度 - 平成24年度 科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）「『地域文化』の生産・流通・消費に関する文化地理学的研究」（代表・大城直樹）を利用した。

【参考文献】

- 1) アーリ, J. (加太宏邦訳)『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』, 法政大学出版局, 1995。
- 2) ルフェュブル, H. (斉藤日出治訳)『空間の生産』, 青木書店, 2000。
- 3) 神田孝治「観光, 空間, 文化—観光研究の空間／文化的転回へ向けて」(橋爪紳也・田中貴子編『ツーリズムの文化研究』京都精華大学創造研究所, 2001) 27-70 頁。
- 4) サイド, E. (今沢紀子訳)『オリエンタリズム』, 平凡社, 1986。
- 5) Shields, R., Places on the Margin: Alternative geographies of modernity, London: Routledge, 1991.
- 6) 与論島の観光に関する研究としては、管見の限り以下のものが存在する。なお、これらの研究は与論島における観光の実態を報告するものがほとんどで、本稿のようにイメージに注目して検討したものは存在しない。(1) 鈴木 公「観光面から見た与論島」, 南日本文化 7, 1974, 15-26 頁。(2) 堂前亮平「与論島における村落の観光地化」, 地域研究シリーズ 1 (与論・国頭調査報告書), 1980, 109-117 頁。(3) 中山 満「与論島におけるリゾート型観光地の形成について」, 沖縄地理 1, 1986, 39-52 頁。(4) 田島康弘「与論島における来訪者とまちづくり—とくにギリシャ村を中心に」, 南太平洋海域調査研究報告 42, 2005, 78-89 頁。(5) 桑原季雄「与論島における観光化と地域振興」, 南太平洋海域調査研究報告 42, 2005, 90-96 頁。
- 7) 与論町史編集委員会編『与論町史』, 与論町教育委員会, 1988。なお、南西諸島とは、九州の南方から台湾の東方にかけて連なる、大隅諸島、トカラ列島、奄美群島、沖縄諸島、宮古列島、八重山列島、尖閣諸島、大東諸島といった、鹿児島県と沖縄県にまたがる諸島の総称である。また奄美群島は、13の島からなり、そのうち有人島は北から、奄美大島、喜界島、加計呂麻島、与路島、請島、徳之島、沖永良部島、与論島となっている。
- 8) 『南海日日新聞』1960年3月3日。
- 9) (1) 『南海日日新聞』1960年3月28日。(2) 『南海日日新聞』1960年4月2日。
- 10) 『南海日日新聞』1961年8月13日。
- 11) 『南海日日新聞』1963年1月17日。
- 12) 『南海日日新聞』1963年2月28日。
- 13) 『南海日日新聞』1963年9月7日。
- 14) 宮本常一・中村由信・中川善之助・織畑基一「日本の島の共通性と特殊性はなにか?」, 旅 37 (7), 1963, 51-56 頁。
- 15) 『南海日日新聞』1964年1月1日。
- 16) 『与論新報』1965年5月1日。
- 17) 『与論新報』1965年8月15日。
- 18) 前掲 6) (1) 15 頁参照。
- 19) 前掲 6) (1) 16 頁参照。
- 20) 小田 実「与論島—ある小さな「日本」」, 朝日ジャーナル (6.10), 1962, 87-92 頁。
- 21) ヨロン島観光協会提供資料による。
- 22) 前掲 6) (1) 18-19 頁。
- 23) (1) 『南海日日新聞』1971年7月3日。(2) 「与論島紀行」, 毎日グラフ 24 (34), 1971, 3-20 頁。
- 24) (1) 『与論新報』1967年8月1日。(2) 「ルボ・崩壊<5> “観光の波”に難破した“誠” 与論島(鹿児島県)」, 朝日ジャーナル (9.17), 1971, 42-46。(3) 前掲 23 (1) 参照。
- 25) (1) 『与論新報』1967年9月1日。(2) 『南海日日新聞』1967年9月3日。(3) 『与論新報』1968年1月1日。
- 26) 『南海日日新聞』1968年2月23日。
- 27) 『与論新報』1968年6月1日。
- 28) 『南海日日新聞』1969年6月11日。
- 29) (1) 『与論新報』1971年5月20日。(2) 地域経済研究会編『与論町中期構想研究報告』, 地域経済研究会, 1979。
- 30) 『南海日日新聞』1970年8月13日。
- 31) 前掲 6) (1) 15 頁参照。
- 32) 新納重博「与論島狂騒曲」, 青い海 2 (4), 1972, 35-39 頁。
- 33) 前掲 23) (2) 18 頁参照。
- 34) 前掲 6) (1) 18 頁参照。
- 35) 前掲 6) (1) 19 頁参照。
- 36) 『南海日日新聞』1971年10月9日。
- 37) 『南海日日新聞』1971年7月9日。
- 38) 「ブームの与論島の聞きしにまさる性解放」, 週刊現代 (6.10), 1971, 116-120 頁。
- 39) 2011年9月6日の聞き取りによる。
- 40) 前掲 6) (1) 16-19 頁参照。
- 41) 『与論新報』1970年12月6日。
- 42) (1) 前掲 7) 699 頁参照。(2) 前掲 21) 参照。
- 43) (1) 前掲 7) 700-701 頁参照。(2) 前掲 6) (5) 93-96 頁参照。
- 44) 渡部雄吉「南の涯ての人々—国境の島・興論島へ行く」, 中央公論 72 (11), 1957, 1-19 頁。
- 45) 稲見輝男「神秘的コバルト色の島・与論島」, 旅 34 (4), 1960, 74-75 頁。
- 46) 前掲 20) 87-88 頁参照。
- 47) (1) 『与論新報』1962年11月1日。(2) 『与論新報』1963年8月1日。
- 48) 沖縄県祖国復帰闘争史編纂委員会編『沖縄県祖国復帰闘争史資料編』, 沖縄時事出版, 1982。
- 49) 「与論島」, 旅 42 (6), 1968, 95 頁。
- 50) 『南海日日新聞』1967年9月29日。
- 51) (1) 川井龍介「『十九の春』を探して」, 講談社, 2007。(2) 前掲 32) 36 頁。(3) 西部 邁『六〇年安保—センチメンタル・ジャーニー』, 洋泉社, 2007。
- 52) 藤原南風『新奄美史 下巻』, 奄美春秋社, 1980。
- 53) 『南海日日新聞』1967年8月10日。
- 54) 『南海日日新聞』1971年7月3日。
- 55) 『南海日日新聞』1968年2月23日。
- 56) 真奈古富士子「いちばんきれいな海で泳いでみたくてたずねた与論島」, 若い女性 14 (3), 1968, 127-128 頁。
- 57) 前掲 49) 参照。
- 58) 『南海日日新聞』1971年3月27日。
- 59) 前掲 32) 37 頁参照。

- 60) 『南海日日新聞』1971年7月7日。
- 61) 「〈現地ルポ〉〈与論〉は若いさすらい人の島だ!!」, プレイボーイ (6.29), 1971, 24-31 頁。
- 62) 前掲 45) 参照。
- 63) 前掲 20) 89 頁参照
- 64) 前掲 49) 参照。
- 65) 前掲 56) 128 頁参照。
- 66) 前掲 38) 参照。
- 67) 「なんでも情報 味のある旅 (1) 夏の与論島・ガールハントに絶好の島旅」, プレイボーイ (8月24日), 1976, 164 頁。
- 68) 「グラビア 現代の顔 “ヤングパニック” 与論島」, 週刊新潮 (8.25), 1977, i- vii。
- 69) 『南海日日新聞』1967年9月29日。
- 70) 『南海日日新聞』1971年7月2日。
- 71) 鬼塚こず得「郷土と私」与論 1, 1969, 101-102 頁。
- 72) 『与論新報』1969年6月10日。
- 73) 前掲 32) 37 頁。
- 74) 前掲 38) 120 頁。
- 75) (1) 『南海日日新聞』1970年8月20日。(2) 前掲 32) 37-38 頁。
- 76) 『南海日日新聞』1971年3月29日。
- 77) 『南海日日新聞』1971年7月2日。
- 78) 『南海日日新聞』1971年7月2日。
- 79) 『南海日日新聞』1964年6月1日。
- 80) 『南海日日新聞』1964年6月17日。
- 81) (1) 前掲 32) 38 頁。(2) 『南海日日新聞』1971年7月6日。
- 82) (1) 前掲 32) 38 頁。(2) 『南海日日新聞』1971年7月10日。
- 83) 前掲 6) (1) 23 頁参照。
- 84) (1) 『南海日日新聞』1971年7月10日。(2) 前掲 24) (2) 45 頁参照。
- 85) 前掲 24) (2) 46 頁参照。
- 86) 『南海日日新聞』1971年7月9日。
- 87) 前掲 24) (2) 45 頁参照。
- 88) めがね商会編『めがね』, めがね商会, 2007。
- 89) 『めがね 最終稿』[台本]
- 90) 2009年9月15日の聞き取りによる。
- 91) 2010年9月24日の聞き取りによる。
- 92) 2009年9月15日の聞き取りによる。
- 93) 2011年9月6日の聞き取りによる。
- 94) 2009年9月15日の聞き取りによる。
- 95) Miho Kikuchi 『あの海がみたくて Yoron Island Shutter Release』, Photo back bunko, 2008。
- 96) 2009年9月15日および2011年9月6日の聞き取りによる。
- 97) 2011年9月6日の聞き取りによる。
- 98) 2009年9月15日および2011年9月6日の聞き取りによる。
- 99) 2009年9月15日の聞き取りによる。
- 100) 2009年9月15日および2010年9月24日の聞き取りによる。
- 101) 2011年9月6日の聞き取りによる。

受付日: 2011年10月14日

受理日: 2011年11月30日

